



令和5年4月、第三十一回日本医学会総会が開催された。日本医学会総会は、明治35年に第一回が開催されて以降、4年ごとに開催されてきた120年の歴史を誇る学術集会である。今年のメインテーマは、「ビッグデータが拓く未来の医学と医療」豊かな人生100年時代を求めて」であり、学生を含め3万7000人以上が参加した。

コロナ禍を経験し、少子超高齢社会を迎える日本の課題を浮き彫りにするとともに、ビッグデータや新技術が医学・医療へ与える変革、豊かで人間らしい人生100年時代を支える医療・介護体制の構築や実装など、参加

限られた時間を真摯に生きる

情報広報部副部長

寺本 瑞絵

者が最新の情報を共有し、そして変革にどのように対応するかを学ぶ会であった。多くの研究者からは、長く継続してあきらめないことが重要であり、自分が好きなことや関心があることに存分に向き合うことが何より大切であるというメッセージを受け取った。

コロナ前は、世界はある程度予測可能であり、IoTやAIなどの技術革新により、将来を見通すことができるだろうという楽観的な世界観があった。しかし、予測は簡単ではないことを全世界で目の当たりにすることになった。A new kind of everlasting present (新たな終わりのなき現在)とも呼ば

れる、未来が保留状態に置かれた中、これらの社会を担う若い世代は不安な思いをしたであろう。毎日の生活も不透明で、やりたいことも決められない日々と不登校や自殺者数の増加は決して無関係ではない。

若年者だけではない。ms.comの医師調査によると、2023年の仕事上の目標調査では、開業医・勤務医ともに「特になし」が32・7%と最多である。今年の目標と限局した質問であるため、返答しにくいことを差し引いても、いささか残念な結果といえよう。さて、東京大学入学式の祝辞がニュースになり、耳にした方も多いと思われる。グロー

バルファンと保健システムおよびパンデミック対策部長の馬淵俊介氏が贈られた祝辞に私は心が震えた。

馬淵氏は、大切であることを二点にまとめて話された。一点目は、「夢に関わる、心震える仕事をして欲しい」ということである。自分が本当に好きなことでなければ、徹底的に突き詰めることはできない上に、幸せの尺度が他人からの評価になる。他人の評価による人生ではなく、自分の人生を生きてほしい。また、夢は探し続けて行動し続けてこそ見つかるものであり、待っていれば突然降ってくるものではない。探し続け、行動し、その中で少しずつ「彫刻」のように形作っていくものである、と述べられた。二点目は、「学問や仕事で身に着けた力である『経験』を組み合わせて、問題解決に挑

むことの重要さ」である。一人で成長するのは難しいが、環境が人を作るため、能力を有する人たちが、修羅場に身を置いて、難しい挑戦を続けることにより、さらに大きな機会に手が届くようになる。経験を組み合わせながら、自分ができることを徐々に増やし、環境を味方につけ、問題を解決する力が、これからの世界では重要になる、と述べている。

そして、最後に、我々が考えるべきリスクは、何かに失敗するリスクではなく、難しい挑戦に踏み込まないことで、成長できず、なりたい自分にならないリスク、世界に対してしたい貢献ができないリスク、行動を起こさずに「現状に留まることのリスク」だとまとめられている。

馬淵氏自身の経験から発せられた想いは、リアリティをもつて多くの人の心に届いたであろう。自分の人生は、自分が生きているこの人生しかない。有限で、なかなか思い通りに進まないこの人生が、自分にとってただ一度きりのチャンスである。

目の前にある挑戦は失敗に終わるかもしれないし、自分の才能の無さを露呈し、周囲の期待を裏切り、恥ずかしい思いをするかもしれない。ただ、人間的な成長につながるならば、結果がどうであれ、進みたい方向へ、目の前の一步を踏み出さずにはいかない。皆さんにとって、彫刻のように形作られていく心とは、本当にやりたいことは何であろうか。

私自身、北海道医師会の仕事を始めて2年が経つ。自分の中で求める姿はまだ不明瞭である。今まで得てきた、また周囲から与えられてきた経験を味方につけ、彫刻のように自分が進む方向を模索していきたい。